

# 今日の台湾における地藏信仰の一側面

## — 『占察経』 を中心に —

伊 藤 真

はじめに

筆者は東洋大学東洋学研究所の共同研究プロジェクト「東アジアにおける仏教思想の成立と展開、並びにその意義の解明」の一環として、「今日の台湾における中国撰述地藏経典の信仰と儀礼の現状」について、聞き取りと観察調査を行う機会を得た。本稿では調査結果に基づき、主として『占察善悪業報経』（以下、『占察経』）の信仰に着目して、今日の台湾における地藏信仰の一側面について報告する。台湾では、日本では実践されていない『占察経』に基づく占いや行法が一部ではあるが実際に行われているが、結論を先取りして述べれば、その実践方法については在家信者の需要に応えようとするものと、あくまでも出家修行者の持戒のために行うという二様の形態が見られたことが発見だった。また、アプローチの違いこそあれ、いずれも自己の内面を直視し、心を清浄にすることで日常生活や修行に資するために『占察経』を活用し、地藏菩薩を信奉するのだという、真摯な信仰の発露である点が共通している。今回の調査はまずは台湾における地藏信仰と地藏経典信奉の現状の概要を把握することが目的であり、教理的・文献学的な側面の詳細な検討は今後さらなる調査・研究を要する課題として残っている点をお断りしたい。

なお、調査の概要は次の通りである。

調査期間：2018（平成30）年2月8日—13日

調査地：台北、台中、南投縣、高雄

調査対象：地藏信仰に関わる宗教施設・寺院、および台湾の地藏信仰に通暁した専門家

### 1. 台湾における地藏信仰と地藏経典

#### 1-1. 今日の台湾における地藏信仰

台湾では、地藏菩薩は観音菩薩と並ぶいわば人気の菩薩として広く信仰を集めている。仏教寺院はもちろん、多くは仏教と混交した信仰形態の見られる道教寺院などでも釈迦如来などと共に地藏菩薩が祀られている。試みに台北市の中心部、松山駅に至近の松山慈祐宮（清代乾隆年間、1753年建立）を訪れてみると、参拝者は媽祖を参拝したあと、六層建ての本殿（三階が「仏祖殿」で仏陀・文殊・普賢・観音菩薩や善財童子も祀られている）を上層階まで巡拝し、再び地上に戻ると福德正神、虎爺、五營兵将といった道教の神々

(順に土地神、財神、護衛神)を参拝していくが、その前に出会うのが地蔵王菩薩である。王冠のような帽子にきらびやかな衣装で錫杖を持つ、台湾でよく見る貴族的な地蔵像である。

地蔵菩薩は台湾では主として先祖供養と孝道の菩薩と見られているが、地蔵菩薩を礼賛する法要でも道教的なものを含め種々の要素が混交した形が見られる。旧暦7月(伝統的に鬼月・農月などと呼ばれるが、仏教徒の間では「教孝月」とも呼ばれる<sup>1)</sup>)中旬の中元節または晦日に各地で行われる「地蔵会」もそうである。本来中元節の儀礼は地蔵信仰とは無関係で、日本のお盆にも似た(ただし先祖ばかりでない)死者供養の儀礼が行われる。これは『盂蘭盆経』や『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼経』などに基づく「施餓鬼という仏教に由来する考え方を基に、仏教・道教が相互に影響しあって、中国的な普渡が形成されていった」ものと推定されると松本浩一氏は指摘している<sup>2)</sup>。ところが尹富氏の論考によれば、明代半ばに地蔵菩薩の生誕日を7月晦日とする伝説が発生し、それが明清時代に7月中旬の中元節の儀礼と混交し、中元節に地蔵会を行ったり、逆に7月晦日の地蔵会の日に盂蘭盆の法要を行ったりする事例が見られるようになったという<sup>3)</sup>。つまり地蔵会は本来7月末に行われるもので、実際、南投縣・地蔵院などでは7月末に行っている。

旧暦7月の地蔵会はこのように明代にまで遡る風習だが、台湾における地蔵会は、清代(17世紀)に主に福建省や広東省から入植した人たちが無縁仏の共同墓で行った中元節の法要に遡れるという。死者の追善供養では主に『阿弥陀経』を読誦するが、地蔵会では『地蔵菩薩本願経』(以下、『地蔵本願経』)が読誦されるという<sup>4)</sup>。

なお、台湾では地蔵菩薩は「地蔵王菩薩」の名で信奉されているが、この名称は盂蘭盆の施餓鬼会と関係の深い失訳『瑜伽集要焰口施食儀』に出る。そこには「衆生を度し尽くさば、まさに菩提を証さん。地獄未だ空ならざれば、誓いて成仏せず」という地蔵王菩薩の本願が礼賛される<sup>5)</sup>。この一節は台湾では地蔵信仰の一種の定番のフレーズになっており、地蔵菩薩を祀る寺院では必ずと言ってよいほどどこかに掲げられており、地蔵菩薩関係の書籍や一般向けに頒布されている地蔵經典類、ウェブサイトなどにも見られる。

## 1-2. 地蔵信仰と地蔵經典

地蔵信仰の教学的根拠となる主な經典としては例えば下記のようなものが挙げられる。

大方等大集経 須弥藏分(2巻、高齊・那連提耶舍訳、大正13)

大方広十輪経(8巻、北涼・失訳、同)、大乘大集地蔵十輪経(10巻、唐・玄奘訳、同)

占察善悪業報経(2巻、6世紀末・菩提燈訳、大正17)

地蔵菩薩本願経(2巻、唐・実叉難陀訳、大正13)

地蔵菩薩儀軌(1巻、唐・輪婆迦羅[善無畏]訳、大正20)

地蔵菩薩陀羅尼経(1巻、訳者・成立不明、同)

那連提耶舍(490-589年)訳の『大集経 須弥藏分』では、深い三昧に入定中に衆生の煩惱・業・苦を枯渴させて救済するなど、同じく禅観を重視する『十輪経』と共に地藏菩薩の比較的古い姿を伝えているとされる<sup>6</sup>。最後の二つは密教系の經典であり、この種のものは比較的多いが本論では触れない。また、このほか中国撰述とされる『閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土経』(通称『預修十往生七経』)や日本で作成されたと考えられる『発心因縁十王経』など、道教の十王思想との混交を示す經典もある<sup>7</sup>。なお、この中で『十輪経』と、実叉難陀訳とされるがそれよりのちの中国撰述經典と推定される『地藏本願経』、そして6世紀後半の中国撰述經典とされる『占察経』がいわゆる「地藏三経」と呼ばれてきた。しかし先行研究では「地藏三経」というのが歴史的概念なのか近代の仏教学上の概念なのか判然としない例が多い<sup>8</sup>。明代に地藏信仰を鼓吹した靈峰藕益大師智旭(1599-1655年)の『讚礼地藏菩薩懺願儀』に「一心頂礼地藏菩薩本願経、大乘大集地藏十輪経、占察善悪業報経及三世一切法蔵」(新纂統蔵74、585a)とあるから、少なくとも智旭がすでにこの三経を中心的な地藏經典として重視していたことがわかる。智旭は後述のように、台湾における『占察経』信仰上、大きな位置を占めている。

### 1-3. 台湾における『地藏本願経』と『占察経』

さて、台湾の地藏信仰の中でも「地藏三経」は重視されているが、『十輪経』は大部で、『占察経』は業報を占う特殊な内容であることなどから、『地藏本願経』がよく読誦され、法話で語られるなど重視されている。この經典は釈尊が切利天に登って仏母のために説法をするという結構であり、釈尊は自らの幾代にもわたる衆生救済の歩みを語ると同時に、弥勒菩薩下生までの間、地藏菩薩に五濁惡世の衆生済度を託す。また、本経は波羅門女、光目女といった女性が亡母を地獄から救うという、地藏菩薩の前世譚で知られ、台湾ではもっぱら「孝道」を説く經典として尊崇されている。今回の調査でも、南投縣・正覚精舍副住職の天因法師はこの經典は「孝心」を養うものだとし、高雄・円照寺の敬定法師も「親孝行」を説く經典だと述べた。このような理解は中国大陆でも同様で、尹富氏も、この經典が「地藏が母を救う本生のお話を編み出し、地藏信仰に新たな内容を注入し、地藏信仰をして中国孝道文化の中に融合させた」と評価する。そして「仏門の『孝経』」と言うべきであり、地藏信仰と(亡母救済譚に基づく)目連信仰を合流せしめて民間に導入する役割を果たしたと述べている<sup>9</sup>。

一方、『占察経』はどうだろうか。この經典は隋末頃の菩提燈の訳とされるが、伝記・由来が不明で、古くから「真偽未分」と疑われ、則天武后の『大周刊定衆経目録』が初めて正当性を認めたものである<sup>10</sup>。また、広州の僧らが実践していた「塔懺法」という懺法と関係していたようだが、勅命により禁圧されたという<sup>11</sup>。現代の学術的研究の視点では、「地藏信仰に基づいたいがわしい偽経」として世間に流布し、「純正な地藏教義より



逸脱したものであることは明瞭」だと酷評されるが、「地藏信仰をして通俗的なもの、現世的なものとして普及せしめ興隆せしめた」とも評される<sup>12</sup>。一方、近年では同経と天台宗や道教の懺法や好相行などの関連に着目した新しい視点の研究も見られる<sup>13</sup>。

この経典は王舎城耆闍崛山で堅淨信菩薩が釈尊に末世の衆生を救う方法を問うのに対し、釈尊が地藏菩薩を賞賛してその法門を説かせるという結構である。だが「木輪」という、小指の半分ほどの四角柱の両端を鉛筆状に削り、中央の四面に文字（十善道・十悪道）、長短の線刻、1-18の数字などを記した小道具をサイコロ式に投げ、出た目

に応じて過去世以来の業報や未来の吉凶を占うことを説く特異な経典である（画像参照）。台湾で『占察経』はどのような目的で、どのように使われているのか。もとより台湾全土における網羅的な調査・報告は不可能だが、以下、調査で見聞できた『占察経』信仰の一端を述べる。

## 2. 台湾における『占察経』の行法の実践

### 2-1. 台湾における『占察経』に依る実践の背景

『占察経』上巻では、末世の福德薄い衆生に不退の境地を得させるために、過去世の業とその報いを占察する木輪の占いと、悪業悪報を浄化して取り除く懺法を説く。それは木輪の占いで完全な好相が出るまで、毎日三時における諸仏菩薩や地藏菩薩の称名・礼拝を繰り返す、時には百日、千日にも及ぶという極めて迂遠なものである。最後に数字を記した木輪によって占われる今世と未来の種々の果報を述べる。一方、下巻ではまず真妄二種の内相と外相の二相を持つ「心」のあり様から説き起こし、一切境界は「差別の相無く」「寂靜一味」なる「真如第一義諦」であると説き、「自性清浄心」を「如来藏」とするなど、一転して心の理論が展開される。続いて、「一実境界」に依止して観法を行うことを説く。鈍根の者は「唯心識観」によって「色寂三昧」を得てから、利根の者が行う「真如实観」に進んで「心寂三昧」に入り「一行三昧」を得る。そして「奢摩他」（内心不可見の想の円満不動を観察）と「毗婆舍那」（内外の色と仏の色身を想見して「幻の如く化の如く、水中の月の如く、鏡中の像の如し」と見る）という二種「観心」を実修する<sup>14</sup>。

さて、このような特異な地藏経典である『占察経』はなぜ台湾で実践されているのか。聞き取り調査では、『占察経』実践の源として、多くの人が明代の智旭の名を挙げ、しかも極めて篤く尊崇していることが窺えた（円照寺敬定法師、地藏院大願法師、大華嚴寺海

雲繼夢和上など)<sup>15</sup>。中国仏教史上、『占察経』と本格的に取り組み、まとまった注釈書類を残した唯一の人物であるから当然かもしれない。智旭は天台法門に属すると見られたり、三教融合の時代的趨勢に合致するとされたりと、先行研究における評価はさまざまだが、華嚴や天台などから修行すべき法門を選び取るためにみずから籤を作ったというほどだから、そもそも占いの類に関心が強かったと見える<sup>16</sup>。智旭は同経について、『占察善悪業報経玄義』『占察善悪業報経疏』（新纂統蔵21）『占察善悪業報経行法』（同74）を残している。『経疏』はほぼ逐語的な解説となっているが、『玄義』は四教、六即、十界、一心三観、三諦円融など、天台教義を援用しながら占察の教理学的意味づけを行い、「三界唯心、心外無法、理具事造実非両重」を悟ることを説き（新纂統蔵21、406b）、「現前一念心」の法に了達すべきことを説く<sup>17</sup>。一方、具体的な行法の面では台湾では『占察善悪業報経行法』が重視され、各寺院に経本型のものが備えてあった。この『行法』は礼贊の文言や香華の供養の仕方など、儀礼の実際の指南書である。ただし、実際にどこまで经文または『行法』に型通り従うかは行者によって違いがあるようである。

智旭が『占察経』の歴史的、思想史上の権威とされることは首肯できるが、実際に今日の台湾において『占察経』の行法が実践されるようになったきっかけは何だろうか。南投縣・地藏院住職の大願法師は、1980-90年代にかけて、『地藏本願経』に依って地藏信仰を宣揚する新しい法師たちが登場し、一種の地藏信仰ブームが起きたことが背景にあると指摘した。今回の調査で訪れた円照寺の敬定法師や、ほかにも台北を拠点に台湾全土に教線を広げている地藏禪寺の地皎法師など尼僧たちの名が挙げられた。一方、佛光大学の關正宗氏は、20世紀初頭に中国の近代化や文化活動で活躍し、中年で出家して以降は中国近代仏教の代表的人物の一人となった弘一法師（李叔同。1880-1942年）が自ら木輪も作成して『占察経』を評価したことを挙げ、その法系に連なる五台山真容寺の夢參長老（1915-2017年）が直接的なきっかけを作ったと指摘した。夢參長老は華嚴思想を軸としつつ、篤い地藏信仰を併せ持ち、米国など海外へも説法に赴いた。2009年には台北国際会議センターにて大勢の聴衆を前に『占察経』について約一か月に及ぶ連続講座式の説法を行った。その様子はDVD15枚セットの「結縁品」（非売品）として頒布されており、映像を見ることが出来る（その説明によれば聴衆は数千人にのぼったという）<sup>18</sup>。今回の調査では直接教えを受けた南投縣・大華嚴寺の海雲繼夢和上を同寺台北別院に訪ねたので後述する。

## 2-2. 占察の実際① 在家信者のための占い——易学仏堂

今回の調査では『占察経』の占いの実際を見聞するため、台中市内にある易学仏堂の黄四明老師を訪ねた。市内の大通りに面した二階建ての簡素な建物で、一階は地藏菩薩の大きな仏像を掲げた玄関と応接コーナー、占いを行うテーブルと椅子のある部屋があり、二階は広い仏間で釈迦三尊や地藏菩薩像が祀られている。簡単に言えば「占い屋さん」風だ

が、料金は取らず、信者や有縁の個人による布施で運営されているという。台北や高雄にも拠点を持ち、黄四明師や有志の仲間の占い師らが『易経』による八卦、四柱推命など伝統的な各種占いやその講座を提供し、『占察経』による占いや講座は黄四明師が担当する。占いを受けるには『占察経』『易経』など当該の教説等を真摯に信奉する者であれば宗派や資格などは問わないという。

黄四明師は電機会社や建築会社勤務などを経て、健康・家庭上の問題により運命の変転に悩み、風水師から『周易』・八字紫微を、高雄の六化寺で地藏・観音法門を修習。1996年に苗栗佛光山で行われた星雲大師（1927年生まれ。佛光山寺開山）の法会で菩薩戒を授かったという居士で、出家僧ではない。衆生救済のために「布施行」を志して台中に易学仏堂を設立し、2001年以来、年間1000人前後のために『占察経』の占いをを行うという。

さて、実際の占いだが、まずは占ってほしい事項（仕事の成否や家族の病気平癒など具体的な事項）をA4サイズのピンク色の質問票に記入する（英語版もある）。ただし、単なる占いではなくあくまでも宗教行為であるから、次のような文言になっている。

「弟子【某】、現にこれ生死の凡夫にして、多く疑惑を懐き、罪障深重、三世の業報因縁を知らず！ 今【何々（知りたい果報）】の一事あり。敬して菩薩の三種の木輪相の示す所に依り、来たりて如法に占察してトせんことを求む。至心に『南無大願地藏王菩薩』と祈叩する、願わくは大悲力を以て、弟子累世の善悪の業根を顯示し、並びに所求の事項の未来の吉凶善悪を指示し、我が疑障を除き、迷津を指引したまえ」<sup>19</sup>

続いて二階の仏間で「南無地藏王菩薩」と地藏の名号を1000回唱え、係のかたに布施を渡しておくとその間に近所の店舗から花や果物を買ってきて地藏菩薩像に供えてくれる。称名を終えると一階の机に向かい合わせに座り、木輪の占いが始まる。以下は大正大学総合佛教研究所の西野翠研究員のご協力で「被験者」になっていただき、実際に見聞した占いのプロセスである。

詳細は経文に譲るが、木輪は3組合計19個あり、最初に表裏に十善と十悪が記されて側面は空欄になった木輪10個を両手に納めて投げ、「邪淫」「妄語」「不偷盗」「不邪見」など表に出た「目」（「木輪の相」という）で過去世以来の善悪の業を見極める。今回は空欄の面が多く出たが、当該の善悪業が無く清浄ということで、好ましい「相」だという。続いて表に出た善悪の業の一つ一つについて、浅深長短の線を四面に刻した木輪3個を投げてその果報の長短軽重を占う。白と黒の刻線が報いの善と悪を、長短がその強弱を明かし、-3から+3までの数値を割り当てその合計値で占う。木輪にはそれぞれ身・口・意の三業のいずれかが記されており、本来は第一の木輪相と合致した場合は「相応」、ずれがあれば「不相応」とされ、それも行者の心の清浄の度合いに関わるが、今回は三業の別を無視して刻線のみを判定したので、運用上やや経文と異なるようである。最後に身・口・意の三業それぞれについて、1から18まで、数字が3つずつ記された6個の木輪を三度投

げ、三業それぞれに合計数1から189までの数を得る。これは業に伴う現在と未来の果報を占うもので、経文には数字に応じて「難所あり」「悪人に会おう」などの現世的な結果から、地獄・餓鬼から天までの輪廻転生の先や「不退を得る」「神通を得る」という修道の進展に関するものなどが記されている。それらを黄四明師は古い事項や現実生活に合わせてアレンジして「地藏王菩薩からの指示」として伝える。經典によれば本来は第二、第三それぞれの木輪相の占いののち、清めた仏間で一日三時ごとに礼賛したり、地藏菩薩の名号を称えるなど、懺法を行い、改めて木輪の占いで結果を見るという作業が繰り返される。しかし易学仏堂では(信者の状況にもよるのだろうが)日々の生活の中で反省・懺悔するアドバイスを与えている。また、「地藏菩薩からの指示」ということについては、黄四明師は幼少より靈感が強く、仏寺における修行時代にも深い瞑想の中で地藏菩薩と感応道交したといい、占いに際しても靈感を得られるとのことだった。

『占察経』は「木輪」自体がイメージしづらいもので、実際に小さな木輪を使った占いを目にするのは興味深いものであった。しかし通俗的な占いと何が違うのか。黄四明師は未来の果報という「結果」を知ること自体を目的としてはならない、と述べた。それら果報は我々が日々抱えている不安や焦燥、希望などの未来を占うものであるが、そこにどのようなこれまでの自身の業が絡んでいるのかを知ること、不安や望ましくない思考・行動の原因などを直視し、取り除き、悪行を犯すことなく日々をより良く生きるのが占いの目的だという。要するに「汝は何によって来たり、どこへ行こうとしているのか」を自覚し、直視するのだという<sup>20</sup>。

### 2-3. 占察の実際② 出家僧尼のための占い——地藏院、円照寺

易学仏堂では日々の不安を抱える一般の人々のために『占察経』の占いを行っているが、今回の調査では在家者のための占いに批判的な声も聞いた。

まず台中から内陸部へ入った南投縣の地藏院で大湛法師と住職の大願法師に話を伺った。この寺院は身・口・意の「三業清浄妙行」の「人乗仏教」を掲げる慈光山僧団の施設で、1990年に開設された地藏信仰専門の道場である(本道場は文殊院)。本堂には像高5.4メートルの台湾最大という木造地藏王菩薩像を安置する。隣接する有機農園「離垢清涼園」で農作業に勤しみながら、18人の出家僧らが厳しい持戒生活を送る。もちろん、台湾の多くの寺院で見られるように、遠近の大勢の在家信者たちが農作業や食事、清掃などの生活全般の諸事をボランティアで手伝っている。僧らの生活は百丈懷海(749-814年)の「百丈清規」をモデルにした規則に従い、「行の中に解あり」として作務を重視する。地藏関連の法要としては主に『地藏本願経』に依り、毎月陰暦晦日に地藏法会を行い、信者ら200-300人が参集するという。清明節(旧暦3月)には日頃の悪業を清める地藏懺法を行う。死者供養と孝道を含む「広結法縁・冥陽両利(広く法縁を結び、死者と生者両方に利

益を与える)」が地蔵院の宗旨だという。地蔵信仰は中国で「孝道精神」と結合し、民間信仰や道教とも融合して大きな光彩を放つようになったと、大湛法師は評価する。

また地蔵院住職の大願法師は、地蔵信仰で最も大切な教説は「懺悔の法門」だと考えている。昨今の地蔵信仰の人気については、僧院によっては死者供養一辺倒で悪霊祓いのようなことも行い、懺悔の法門を説く法師らでも、一部では説法ばかりで実践的な行法を教えず、あるいは特定の所作ばかりやっていたらよいかのように説くなど、一種の流行を作りだしているだけだとして、大願法師は批判的である<sup>21</sup>。

また、『占察経』については、道教の通俗的な占いとは異なり、戒・定・慧のそろった体系であり、自らの「心中から出で来た理」を見つめて懺悔し、完全な清浄を得ることを説く経典だと見ている。しかしその行法を完遂するのは現実的には極めて困難であると、行法としての限界も認めている。厳しい修行をした出家者でなければ単なる迷信的な占いに堕してしまうため、大願法師は出家僧が修行や持戒の進展を見極め反省するために占察を行うことは認めるが、在家者の運勢占いは行わない。在家者には『地藏本願経』がふさわしいと言う。この経典は孝道や六道輪廻を説くだけでなく、その本質は「因果の理」を説くことにあり、これをしっかりと理解して暮らしに活かすことは在家者が心の清浄を得る上で重要であり、かつ実践可能だと言う<sup>22</sup>。

高雄・円照寺住職の敬定法師も占いについては同様の見解を抱いている。敬定法師は高雄の無住となった小さな寺を引き受け、一週間潔斎精進する「七日地蔵法会」で弘法を試みたが、当初人々は地蔵菩薩を死者鎮魂の菩薩だと曲解し、境内に死霊が集まって来て縁起が悪いなどと批判もされたという。しかし法師は、地蔵菩薩はあくまでも（死者・先祖だけでなく生者も含む）一切衆生の救済者であると説き、法会を続けるうちに理解を得て、今では台中、台北にも別院を構えるほどの大きな教団となっている。

その敬定法師は『占察経』は出家者のための教えであり、智旭の『行法』も読経、懺悔、座禅、潔斎に加え、場合によっては一定期間狭小な個室に籠りきりで座禅を行う「閉関」という難行も必要となるという<sup>23</sup>。厳しい修行の上に初めて占いを行えるのであり、円照寺でも在家者には孝道を教える『地藏本願経』を弘法しているという<sup>24</sup>。

#### 2-4. 占察の実際③ 新たな活用法——大華嚴寺

最後に、独自の取り組みをしている南投縣・大華嚴寺の活動を報告する。

大華嚴寺の海雲繼夢和上は中国・五台山の夢參長老に師事して具足戒を受け、賢首宗42世、同大華嚴寺系1世を名乗る。経済官僚を辞して1987年に台北で出家してから華嚴法門を弘法し、1992年から南投縣の山中深い大華嚴寺を拠点に台北、台中、高雄、米国などの別院でも活動。夢參長老の伝統を継いで華嚴思想と並び地蔵法門も重視し、在家信者向け



に「占察行法班」という実践講座も開講している。

同寺の黄琛傑老師によれば、占察法門は仏法中から発展してきたもので、八卦・算命術など世間の占いとは異なる。その目的は第一に自己の身・口・意の三業の浄化、第二に修行上の障礙・疑惑・困惑の解決のための「方便接引」だと位置付ける。占察を行うには三業の浄化を前提とするため、同講座では木輪の占いを学ぶまでに二、三年の課程が必要となる。そして『占察経』の主眼は上巻の木輪相の占いではなく、下巻の観法の実践にあるとして、講座では教示はするが、実際は木輪相の占いは行わず、同様の効果・結果を得られる独自の懺悔・自浄の修道体系を導入しているという（内容は外部には非公開）。ただし、機根の劣る者は「事」によって「理」に引導することが必要な場合もあり、全く木輪の占いを否定・排除するものではないと海雲和上は言う。

この点は、華嚴思想の研究・教育・弘法を専門とする台北の華嚴專宗学院の賢度院長の考えも近い。『占察経』で最も重要なことは業報とは何かを修行者に体得させることであり、仏法に対する堅固な信念があれば、方便であって究竟ではない占いは不要だとする。ただし、悪業とその報いへの恐怖が修行の妨げとなるような鈍根の者は、占いによって業報の「理」を「事」の形にして見ることで理解納得し、安心して修行できるのならば行えばよいとする。それは衆生のどれほど小さな善根であってもそれを捉えて悟りへ導こうという、『地藏本願経』における地藏菩薩の姿勢に通じるものだと賢度院長は言う<sup>25</sup>。

なお、海雲和上は『占察善悪業報経』という経典名が通俗的な「占い経典」であるかのような誤解を生んでいるとし、経典末尾の付嘱流通の文言（大正17、910c）に基づき『仏説大乘進趣方便経』との経名に改めて、布教・修習を図っている<sup>26</sup>。

### 3. まとめ

以上、現地調査に基づき、台湾各地における『占察経』の教説の実践について報告してきた。今回発見だったのは、在家信者向けに中国の伝統的な種々の占いと並んで木輪相の占いを提供している易学仏堂のような事例がある一方で、この占いはあくまでも出家者自身の持戒の行法だとの見方もあるという、両様の見解・実践が見られることである。Kuo Li-ying（郭麗英）氏が指摘するように<sup>27</sup>、民間信仰の文化の中で民衆の要求に応じながら仏法を弘通するのも（特に中国）仏教の懐の深さだとも言えるだろうし、居士として菩薩道を追究せんとする易学仏堂の黄四明師のような在俗の修行者にとっては、世俗の現場における一つの具体的な慈悲の実践でもあろう。さらにまた、占いはあくまでも己の不安の根源を明らかにし、直視し、そこを脱して未来へ向かってより良く生きていくためだ、という立場でもあった。一方で、『占察経』の法門は通俗的な占いでもなければ、「いかがわしい」教説でもなく、極めて厳しい持戒と自浄の修道体系を説くものだとし、出家者にのみ実践を認める立場にもまた、僧尼の多くが厳しい戒律の中で出家者として修行・弘法

に勤しんでいる台湾仏教らしい特徴も感じられる。

木輪で業報を占うというのは、現代的な感覚からすれば奇異の感を否めない部分はあるだろう。だがこれまで見てきた『占察経』に対する二様のアプローチの根幹には、いずれも厳しく自己の内面や行為における善悪（の業）を直視し、その心を浄化し、より深い仏法の理解・体得へ進んでいこうという姿勢が見られる。地獄が空になるまで一切衆生を度し尽くす大いなる救済者である地藏王菩薩の加護への深い信奉を胸に、「如幻如化、如水中月、如鏡中像」でありながら一切が真実であるという「一切境界無差別之相、寂靜一味」<sup>28</sup>の体解へ向けて仏道を歩む、台湾のそんな在家・出家両様の仏教者の姿に、どこか鮮烈に清新なものを感じたことを記して、本報告を終えたい<sup>29</sup>。

#### 注

- 1 聞き取り調査における佛光大学仏教学系助理教授の關正宗氏談。
- 2 松本2006、134、143頁。
- 3 尹富2009、297-298、336、352-353頁など参照。なお、これに先立ち明代中葉には、『盂蘭盆経』に語られる亡母を救済する目連に対する信仰と、地藏信仰が融合し、『三教源流聖帝仏祖搜神大全』などでは目連が死後に「地藏王」に生まれ変わったとされていることも指摘している。同、277、294頁。
- 4 關正宗氏談。
- 5 「衆生度尽、方証菩提。地獄未空、誓不成仏。」(大正21、476c)。
- 6 西1966、240-247頁。『大集経 須弥藏分』と『十輪経』の関係については松本1927、157-159頁にも論じられている。
- 7 これら経典についての先行研究に Visser 1914、松本1927、真鍋1960、西1966、速水1975、和歌森1983、Lai 1990、Wang-Toutain 1998などがある。Itō 2016A、2016B 末尾の参考文献も参照。
- 8 松本1927、298頁、速水1975、112頁、真鍋1960、73頁、張2003、3頁など。
- 9 尹富2009、276-277頁。
- 10 真鍋1960、98頁。
- 11 Kuo 1994、155-156頁、師2011、139-142頁。
- 12 真鍋1960、15、106頁。
- 13 遠藤2000、池平2000、師2011など。また、Itō 2016A（この経典と『大乘起信論』との関係についてはこの拙論注1を参照）。
- 14 大正17、908a-b。
- 15 敬称は各寺院・施設の表記に従った。
- 16 張1975、220頁。なお、張氏は智旭を「『楞嚴経』中心の禪者的浄土行者」と見る（同、357頁）が、智旭の『周易禅解』に着目した岩城英規氏は異論を唱えている（岩城1991参照）。
- 17 「現前一念心」については張1975、篠田2003など、智旭における『占察経』の二種の観法については窪田2010などの論考がある。
- 18 『夢參老和尚主講・占察善悪業報経』、覚慧印経中心。なお、日本の地藏信仰との関連について言えば、台湾では戦後に日本人を帰国させ、寺院や関連施設・財産などは接収して売却・転用・廃却するなどしたため、今日の台湾仏教において日本仏教の影響は極めて小さい（江燦騰2012、7-8頁）。
- 19 「弟子【某】、現是生死凡夫、多懷疑惑、罪障深重、不知三世業報因縁！ 今有【何々】一事。敬依菩薩所示三種木輪相、來如法占察求卜。至心祈叩『南無大願地藏王菩薩』、願以大悲

- 力、顕示弟子累世善悪業根、並指示所求事項未来吉凶善悪、除我疑障、指引迷津。」
- 20 「従你是因何而来、又将従何而去。」なお、前世の業報が現世を規定するという思想は社会的差別との関係で留意を要するが、黄四明師は、一切衆生は「如来蔵」であり平等だとの大前提に立つと共に、あくまでも己を見つめることに徹するべきだと強調する。
- 21 Kuo Li-ying (郭麗英)氏は『占察経』の第三木輪相の部分を通俗的占いと全く変わらないとし(経文自体はそれを否定しているが。大正17、902b)、それは經典製作者(達)の民衆への弘法の努力の一環だと評価する。明代には菩薩道の進展をゲーム化した双六も弘法の一助となったことなどを例に、この經典は民衆の生活文化に根ざした要求に応える面と精神修行の両面を持った經典であるとし、仏教は単一ではなく、そこにこそ仏教の豊かさがあると指摘する(Kuo 1994、153、162-163頁)。どこで線を引くべきか、一考を要する指摘だろう。
- 22 「読経不如解経、解経不如行経。」という実践主義に基づく。なお、『占察経』自体は、「若欲観他皆亦如是」(大正17、903a)と、在家者など他人の業報を占うことも否定していない。
- 23 南投縣の地藏院に近い正覚精舎副住職の天因法師は「閑関」の行を完遂したことがあるという。天因法師もまた、『占察経』の上巻は懺法(戒・事)、下巻は観法(定・理)の実践で、この事理無礙相摂するところに「一切法は真如」と徹見する解脫智見(慧・事事無礙)が得られると言い、上下巻の実践が両方伴わなければならない(したがって在家者が実践するのは難しく、占いだけ行うのも不適切)と考えている。
- 24 なお、敬定法師は日本の地藏信仰に大いに批判的だった。それは、一切衆生の救済者ではなく専ら水子供養の菩薩とされ、また道祖神と習合して路傍の石仏のような「みすほらしい」祀られ方をされるなど、地藏菩薩の大いなる救済力とそれへの信仰を矮小化しているとの批判である。また、今回お会いした法師のかたがたの大部分は『占察経』を真正な仏説と見て、中国撰述説に否定的だった。
- 25 『地藏本願経』には「但於仏法中所為善事、一毛一滯一沙一塵、或毫髮許、我漸度脱、使獲大利。」(大正13、779c)とある。このような地藏菩薩による救済についてはItô 2016Bを参照。
- 26 延寿の『宗鏡録』巻3、5、35、84に『進趣大乘方便経』として引用がある。
- 27 注21参照。
- 28 「如幻如化」以下は『占察経』、大正17、908b、「寂靜一味」は同、907c。
- 29 本調査では、調査に応じていただいた方々と、華嚴専宗学院元副院長(現・篤行念佛会住職)の積慈一法師、華梵大学東方人文思想研究所の范明麗博士生、大正大学総合佛教研究所の西野翠研究員の諸先生に大変お世話になりました。また、予備調査では筑波大学大学院博士課程在籍の釈妙玄法師にご助力いただきました。この場を借りて心より謝意を表します。

略号 大正：大正新脩大蔵経、新纂統蔵経：卍新纂大日本統蔵経

#### 参考文献

- 池平紀子『『占察善悪業報経』の成立と傳播について』、吉岡忠夫編『唐代の宗教』所収、朋友書店、2000
- Itô, Makoto. “The Role of Dizang Bodhisattva in the *Zhancha jing*”, 『印度学仏教学研究』64巻3号、2016 (2016A)
- . “Sentient Beings and their Salvation in the *Dizang Pusa Benyuan jing*”, 『仏教学会紀要』21号、佛教大学、2016 (2016B)
- 岩城英規「智旭『周易禪解』について」、『印度学仏教学研究』40巻1号、1991
- 尹富『中國地藏信仰研究』、四川出版集團巴蜀書社、2009
- 遠藤純祐『『占察善悪業報経』の信仰』、『現代密教』13号、2000
- Kuo Li-ying. “Divination, jeux de hazard et purification dans le bouddhisme chinois: Autour d'un *sūtra* apocryphe chinois, le *Zhanchajing*”, *Bouddhisme et cultures locales, Études Thématiques 2*, l'École Française d'Extrême-Orient, 1994

- 窪田哲正「智旭における『占察経』二種観道説」、『印度学仏教学研究』58巻2号、2010
- 江燦騰『認識臺灣本土佛教』、臺灣商務院書館、2012
- 篠田昌宜「智旭『占察経義疏』に於ける「現前一念心」について」、『駒澤大学仏教学部論集』34号、2003
- 張聖巖『明末中国仏教の研究』、山喜房仏書林、1975
- 张总『地藏信仰研究』、宗教文化出版社、2003
- 西義雄「地藏菩薩の源流思想の研究」、金倉博士古希記念論文集刊行会、『印度学仏教学論集』所収、平楽寺書店、1966
- 速水侑『地藏信仰』、塙書房、1975
- Visser, M. W. de. *The Bodhisattva Ti-tsang (Jizō) in China and Japan*, Oesterheld, 1914
- 松本浩一「中元節の成立について」、愛知大学国際中国学研究センター編集・発行、『現代中国学方法論とその文化的視角 [方法論・文化篇]』所収、2006
- 松本文三郎『仏典批評論』、弘文堂書房、1927
- 真鍋廣濟『地藏菩薩の研究』、三密堂書店、1960
- 師茂樹「占察経の成立と受容」、『日本仏教学会年報』77号、2011
- Lai, Whalen. "The *Chan-ch'a ching*. Religion and Magic in Mediaeval China", *Chinese Buddhist Apocrypha*, ed. Robert E. Buswell, Jr., University of Hawaii Press, 1990
- 和歌森太郎「地藏信仰について」、桜井徳太郎編『民衆宗教史叢書第十巻 地藏信仰』所収、雄山閣出版、1983
- Wang-Toutain, Françoise. *Le Bodhisattva Kṣitigarbha en Chine du Ve au XIIIe Siècle*, Presse de l'École Française d'Extrême-Orient, 1998

キーワード：占察経 木輪 占い 地藏菩薩 地藏王菩薩 台湾